



柚木 學 學長

■インタビュー／'94関西学院同窓会神戸支部総会開催に際して

「自然と人間の共生」「人間と人間の共生」が総合政策学部の基本理念

柚木 學 〈関西学院大学学長〉

今年四月、柘植一雄前学長の後を受け新学長に就任した柚木學経済学部教授に、来春開設の「総合政策学部」の基本理念や方向性などにつきお話を伺った。専門の日本経済史、特に酒造経済史、近世海運史等についても丁寧にお話し下さった。

★私の研究も正に神戸と結びついているんです。

大学院で日本経済史を専攻したんですが、博士課程に進んだ頃から、神戸の地場産業である灘の酒の史料に手

をつけることになったんです。メソジスト系の関西学院は禁酒禁煙、学内では今でも厳格に守られているわけですが、その関学で酒に関する研究をやってきたのも不思議ではありますね(笑)。父が灘酒の研究をしております、研究半ばで亡くなったのですが、その同じ研究に私も関わることになろうとは思いませんでした。しかし、灘酒経済史料室などに父が書いたものが残っております、それを見ました時は懐かしかったです。数え年十二歳で別れた父の「におい」が残っていました。

江戸時代、商品流通の中心は大阪であり、灘の酒のほとんども船で江戸に運ばれていたわけですが、その輸送の海運史は誰もあまり研究していないし、面白そうだと興味をふくらみ、酒造経済史から海運史に入っているました。歴史は過去のもので、オリジナルな史料などに当たることによって、歴史学に課せられた実証主義に立ちながら、その意味づけなり、理論化を試みることができま。今回の学長職は、定年を間近に控えて、研究のまとめとして新たに本を出版しようと考えていた矢先のことでした。

★少人数でみっちり総合的政策を立案できる人材を。

一八八九年、米国・南メソジスト監督教会から派遣された宣教師W・R・ランバス博士によって関西学院は創立されました。新しくキリスト教主義に基づく青年の教育と世界宣教を目指した博士にとって、文明開化の花咲く港町神戸の地を選んだということにひとつのねらいがあったと思うんです。その創立時より視野を世界に広げようとしてきた志向性は一九二九年に移転した西宮・上ヶ原キャンパスに引き継がれると共に、来春開設の神戸・三田キャンパス「総合政策学部」にも脈々と受け継がれています。発展という美名のもとに地球規模で環境破壊、汚染が拡大し、飽食と飢餓が同時進行する現代世界、私たちはかつて人類が予想だにできなかったような深刻な危機に直面しているのではないでしょうか。また各地で社会体制の激変が起こり、経済がグローバル化する中で、新たな摩擦や軋轢が生じ、平和、人権が脅かされています。地球規模での「持続可能な発展」というグローバルな課題を追求しようとする「総合政策学部」の基本理念はヒューマン・エコロジー（人間生態学）を基盤にした「自然と人間の共生」、「人間と人間の共生」です。専攻コースとしては、エコロジー政策、都市政策、国際発展政策の三つのコースがおかれますが、私たちが直面している数々の課題に 대응していくためには、人間社会のあり方というものをより総合的・包括的に理解する観点が必

要になります。ヒューマン・エコロジーを基本的視座に、既存の諸科学を総合的に組み合わせ、「Think globally, Act locally」の発想のもと、理論と実践の統合を図ることが不可欠でしょう。そして、その根底には民族や言語、国境の壁を越えたグローバルな視野からの異文化理解と人を愛し慈しむ精神がなくてはなりません。その精神こそが他者や社会、ひいては世界に役立つ確かな視点をもつことにつながっていくはずで、「総合政策学部」としての開設は慶応、中央に続き三番目となりますが、

関西学院としては、生活密着型、社会福祉追求を強調していきます。世界に向けられたまなざしと奉仕の精神を

創立以来の伝統とする関西学院が、全世界的な課題である環境問題や都市問題、国際問題などを教育・研究の主題として取り上げる「総合政策学部」の設置に踏み切ったのは必然的な流れと言えます。この新学部開設は関西学院の歴史上大きな節目となりますが、スクールモットー「Mastery for Service」私たちは努力して専門知識の習得と人間形成に努めなければならないが、それは単に自己の利益のためではなく、隣人への奉仕のためでなければならない」との精神にかなうものでしょう。そうした精神なり、基本理念を反映させたカリキュラムを基に、小集団教育、外国語教育、コンピュータ教育の徹底を図ってまいります。教員の半数近くは外国人及び海外での長い活動経験をもつ人々から構成される予定です。英語教育は、今改めて「英語の関学」の復活を目指し、語学中心でも英会話でもなく、言語文化、外国文化を理解した上で自分の意見、考えを表現することに重点を置いた発信型、英語で講義される専門科目と密接に連携を保ちながらの、総合的なコミュニケーション能力の養成を図るものです。設置科目の充実はもとより、コース間、科目間の連関性、全体の一体化を重視したカリキュラム構成のもと、追求していくべき多くの命題に対し総合的政策を立案できる人材づくりに、じつくりと取り組んでまいります。

世界の真珠業界のリーダーに

パールシティ神戸が世界に向けて

発信するパールモニュメントを

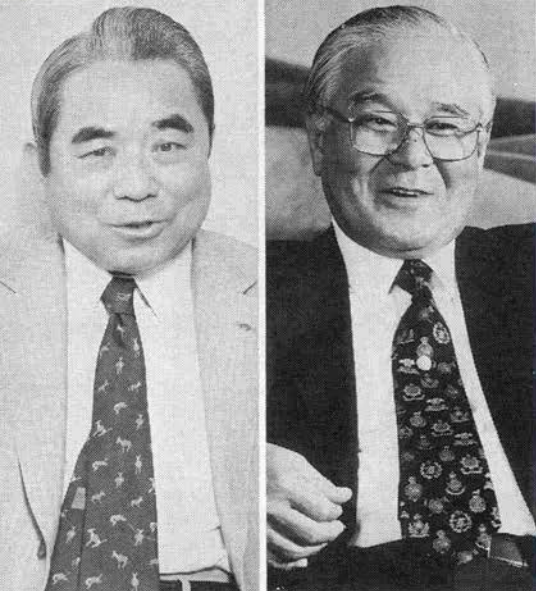
△座談会出席者▽（五十音順・敬称略）

木下 章夫〈株式会社木下真珠
代表取締役〉

須藤 雄二〈伊豫真珠株式会社
代表取締役社長〉

高橋 洋三〈タカハシパール株式会社
取締役副社長〉

田崎 俊作〈田崎真珠株式会社
代表取締役社長〉



田崎 俊作さん

中村 友一さん

近澤 真〈北村真珠株式会社
社長〉

中村 友一〈有限会社御影貿易商事
代表取締役社長〉

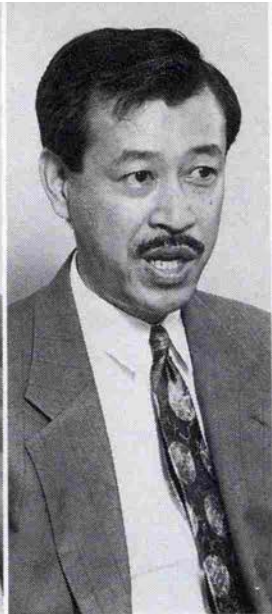
山本登里夫〈株式会社山勝真珠
専務取締役〉

司会 本年9月、大阪に関西新空港が開港。関西が全国から熱い視線を集めています。この国際空港と神戸を結ぶ交通機関の整備も着々と進められ、国際都市神戸がますます世界との距離を縮めます。さて真珠業界では今秋、第1回の真珠国際会議が開催されるということですが、日本が誇る神秘の宝石が国際化の中でどのような位置づけをされていくのか、神戸でご活躍中の真珠業界の皆様にお話を伺いたいと思います。

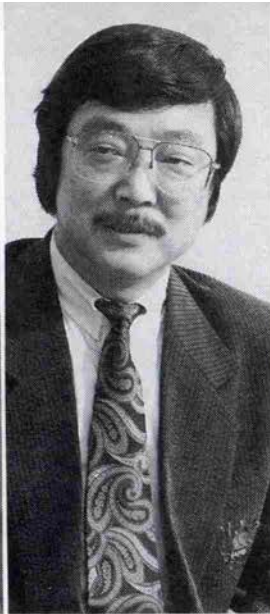
中村 御木本幸吉が真珠の養殖に成功して100年が過ぎました。かつては日本唯一の特産品ということで、真珠に関して日本は世界中のフォーカスでありましたが、最近では生産の国際化、流通の国際化が話題にのぼるようになりました。ここでこの国際化という言葉について考



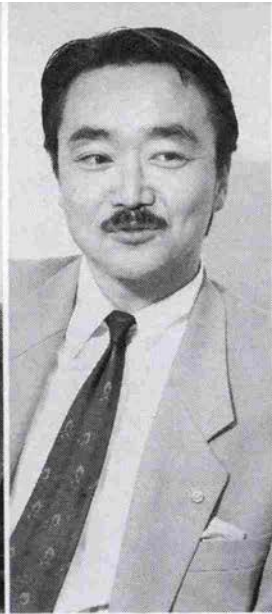
山本登里夫さん



近澤 真さん



高橋 洋三さん



須藤 雄二さん



木下 章夫さん

えたいのですが、イタリアの服を着てドイツの車に乗り、フランス料理を食べ、ハワイに行った話をしていけば、それが国際人であると思込んでいる人が本当にいるんです(笑)。私が思うに、真の国際化とはまず自分の国を知ること。その上で相手の国についてよく勉強し、理解をすることであると考えます。例えば宝石の場合、ヨーロッパでは昔から伝統的に宝石に対する愛着がありました。日本におけるそれは、戦後、ゆとりが生まれてからのこと。つい最近のことですね。そしてアメリカにおいては伝統的な愛着というよりは実利的な意味合いをもっています。真珠に関して日本は、長い間リーダーの立場をとっており、こちらの考えを一方的に押しつけることもできましたが、もうすでに日本の物差しで相手の国を測ることはできない時代に来ています。

山本 国際化という言葉には少々不満がありますね(笑) 真珠にはこれまで国際商品として100近く取り組んできた背景があるんですよ(笑)。中村さんがおっしゃったように、国にはそれぞれの文化があります。それに合った商品開発をしていけば、より売れるには違いないのです。そしてそれぞれの国の取引慣習が異なっているのです。海外の文化には様々な個性がありますが、なにも千も一万もあるわけではありません。個性のグループ化を計った時、それはひとつの大きさをもつマーケットになります。そこへ私達のはっきりとした商品、考えをもつて行けば、理解を示してくれるグループも現れるでしょう。真珠は国際商品である認識を持っていないといけませんね。

田崎 真珠は日本の特産品ではなくなりました。文化もスポーツもボーダレスの時代ですから、何も不思議なことではありません。真珠は商う品でありながら文化的な価値の高いものです。頭を切りかえ、商売をそれに合わ

せていかなければ取り残されています。貝がつくり出すという意味ではあこや真珠も淡水も南洋真珠にも境目はないですよ。日本の真珠産業を守ること、水産庁の指導のもと業界でもいろいろな方針を決め、取り組んでいます。しかし、日本の真珠業界は養殖や加工については一日の長があるので、それを活用して世界をリードする役割を果たしていかなくてはいいけませんね。

高橋 真珠業界はこの15年間ほどで随分変わりました。真珠そのものに変化が起こった訳ではなく、真珠をとりまく環境が変わったのです。それに応じて我々の商売、立場もそれなりに動いてきました。我々の社会的認知度がそこそこ上がっていると、今までは望んでも得られなかったものが望めるようになったのです。例えば従業員の募集について。地域に認知されている、事業内容もある程度理解されているということで、かなりの反応がみられます。真珠産業そのものが貿易商社、メーカーというだけでなく、宝飾業者のイメージが色濃くなってきたために、一般消費者との距離が近づいたんですね。1981年、ポルトビア博覧会の年に「パールシティ神戸」をうち出して14年、当時博覧会に出展されたのは非常に先駆的な企業ばかりでしたが、今やかなりの数の業者がそこまで来ている。裾野が広がった嬉しさと同時に競争相手が増えたという困惑がありますね(笑)。

近澤 真珠は生まれた時からほぼ100%が輸出商品でした。輸出貢献企業として表彰を受けている会社ばかりの業界です。その業果に国際化という言葉が使われだしたのは、中国であこや真珠が生産されるようになった頃から。南洋真珠の生産が始まった時にはあまり問題にはなりませんでしたね。そしてみなさんがそれぞれ中国へ出向いて現地のあるこや真珠を見、品質の点で、これなら

日本のあこや真珠はまだ大丈夫だろうと、一段落ついているのが今の現状ではないでしょうか。どこでつくられていようと、美しいものが売れる。危機感はあるけれども、良いものをつくっていれば大丈夫と、それほど逼迫はしていないんです。ただ流通面ではいいものを売る努力が、まだまだなされていませんね。1級、2級、3級、4級品と、生産者側からすると、つくるためのコスト、労力は同じなんです。よいものをつくらうという気は勿論ありますが、2級品ができて、そこそこ売れてしまう。それがおかしな安心感を生んでいるんです。それと養殖の仕事は地方で行われていますのでとても閉鎖的です。情報もあまり訴求力をもたない。世界の真珠の品質が上がってきた時、日本の真珠がどうなっていくのか、それが不安ですね。

須藤 オーストラリアの南洋真珠も今までは日本の資本と、日本の技術でつくられてきましたが、徐々に現地の人々が自分達の手でやっていきたいと表明しています。インドネシアの真珠も日本人の手を離れていきました。生産にそのような変化が起こってくると、次は流通面にも影響がでるだろうというのには目に見えています。国際化という取り澄ました言葉の裏には、日本人が手を触れることのない真珠の出現に対する焦りが隠されているのではありませんか。

木下 国際化、と言いますが、過去の真珠の歴史をみると、日本はもとより太平洋、日本海、地中海等世界の国々で真珠は生まれ、命をかけて真珠貝を求めて海に潜ったと思われますね。その証しが北京、台湾での両博物院にある数々の真珠の宝物。北京の故宮博物院へは昨年13年ぶりに行きました。14年前に神戸博で真珠でできた宝物を借りに行った時のことを思い出して懐しかったですね。ヨーロッパではクレオパトラの逸話にもでてくるよ

うに各地の博物館には真珠の装飾品が数多く陳列されています。幸い我が国では100年前御木本幸吉をはじめとする先駆者のお陰で人為的に真珠をつくる事に成功したわけですね。まだ僅か100年、長い長い真珠の歴史の中のほんの一頁です。これからは日本だけでなく貝が生息する所、その種類を問わず各国がこの海の宝石を求めて挑戦してくると思います。その時に日本の我々業者が日本人特有の感性をもって、真珠の価値観、神秘性、創造性のリーダーシップをしっかりとれる自負心が必要だと思えます。胸をはって真珠の仕事ができるよう、こだわりをもってやらなきゃいかん。気を引き締めないとね。

司会 さてエリアを狭めて、神戸という街と真珠との関わり方、真珠の街神戸のこれからについて伺います。

高橋 業界が、「パールシティ神戸」を打ち出して14年、まず知ってもらいましょうというところから始めて、対外的にはまだまだ不十分だと思えますが、地元の人にはかなり認知してもらったことができました。行政、そして産業界の方々に知っていただけたのが大きいですね。神戸で商売をする以上、神戸と上手にかみ合っていきたいと思うんです。そのためには、我々真珠業者そのものの品質が問われるでしょう。真珠はイメージ商品です。横から横へ流して金を儲けたらいいという訳にはいきません。文化のレベルで真珠がもつ価値観と商売をうまく絡めていきたいのです。商売とは真珠のように美しいものではありませぬけれど(笑)、真珠を扱うのに相応しい我々の姿が、ファッション都市神戸のイメージづくりにつながっていけば、と考えています。

司会 神戸のファッションパーティを取材に来た東京のジャーナリストが、皆、口を揃えておっしゃるんです。「会場に来ているお客さんの身につけている真珠が素晴らしい」

らしい。神戸って本当に真珠の街なんですかね」と。
中村 神戸の人がパールコンシヤスになっているというのを認めてもらえるのは、業界の努力の結晶ですな。

須藤 北野あたりに、真珠のモニュメントが欲しいですね。現在の真珠会館はあまり存在を知られていませんから。真珠の歴史についてや、その他真珠についての全てがわかる、ホールつきの真珠会館なんてどうですか。観光向きのビジュアルにもなります。真珠といえは三重のミキモト真珠島が浮かぶという人が多いですよ。それをこちらへ引っぱってこないと。一般の人の真珠への関心が高まるような楽しい会館が欲しいです。うちは売上げの7割が養殖なんです、今でも海女さんを何人雇っているんですか、なんて尋ねられる(笑)。

木下 それはそれで夢を壊さないでおくのもいいですけどね(笑)。神戸には真珠が似合う雰囲気がある。金沢なら塗物、京都なら着物という具合に、それぞれのイメージがあります、やはり真珠は神戸。芸術家やクリエイターが多く住み、早くから外国文化が入っていた土壌が関係していますかね。

中村 真珠業界には、つくれば売れるという時代がありました。伝統の上にあぐらをかいていた時期があったことを否定はできません。他国で真珠の生産が始まったのを刺激に日本はバイオニアとして、このままでは無秩序に無作為につくられてオーバープロダクトになりかねない世界の真珠の、交通整理を行なわなければならぬと思います。創造のない伝統は形骸でしかありません。今秋に神戸で開催される第一回真珠国際会議では、真珠をつくる国、使う国が一堂に会して意見を交換しあいましょう。

田崎 日本の中のパールシティ神戸を、世界の中のパールシティ神戸にまでもっていくビジョンを創造していきたい

たい。今度の真珠国際会議はその第一歩です。そしていずれば各国の真珠を集めた世界のパールフェアを神戸で行いたいという夢があります。世界中の真珠関係者が神戸に集まり、神戸から世界に発信できるような魅力的で話題性のあるフェアの開催を考えています。例えば御木本幸吉翁が言った「世界中の女性の首を真珠でしめてごらんにいれます」の言葉をひき継ぐような夢について考えたいのです。とはいえ商売のことを疎かにする訳にはいかない(笑)。実際経費も並大抵のことではないですからね。経営者としては夢は大きく現実的な実行にどうバランスをとるか、難しいところですよ(笑)。

山本 品質の良し悪しについていろいろ言われる真珠ですが、時代によって好まれる色、形は変わってきています。エメラルドやサファイアも昔と今では色が違うんですよ。これは蠟燭、タングステン、蛍光灯と照明器具の変遷によるところが大きいんです。日本人女性の髪の色も昔はまさしく烏の濡れ羽色の真黒でしたが、今は少しブロンズを帯びています。ですからそれに似合う真珠の色も変わってくるのです。また、真珠は直接肌につけるものでしたから耐久性の面でも品質が問われたのですが、服の上に着けることが増えた昨今ではそれが少し緩まったと思います。このように生活様式の移り変わりにより、品質の基準も変わっていくのですが、メーカー側の基準は固定されたままです。中国産の真珠は品質が劣る、と言いたいところなのではないでしょうか、それはそれでいいのではないのでしょうか。冷してそのまま食べて美味しいぶどうもあれば、ワインにして美味しいぶどうもあるんです。

高橋 白いのが好き、黄色いのが好き、涙型のが好き、とお客様のニーズが多様化しているのです。品質は価値づけではなく、それがどのような商品であるのかを示す

べきだと思えます。

近澤 一般のエンドユーザーにわかりやすく丁寧な商品説明のできる小売店側の体制が必要ですね。真珠会館の中に教育機関を設け、例えばパールアドバイザーといった名称のライセンス制を敷くのはどうでしょうか。

須藤 昨年、神戸にはマイスター制度ができましたね。高橋 行政の力をお借りしたいです。我々が目立とうというわけではありません。神戸の魅力のひとつとして真珠をクローズアップしていただきたい。そのためにはやはり先程から話に上がっている、発信力のあるモニュメントが欲しいです。

山本 山本通をパールストリートにという要望で、お金をかけてパールモニュメントをつくりました。パールストリート全体のシンボルに思っていたのに、道路の規制があるからと設置の許可がおりなかった。やむなく私有地の、でもできるだけ公道に近い所に設置しましたけど、その場所に不法駐車しています(笑)。

須藤 北野に観光バス用の駐車場を是非つくってもらいたいです。真珠会館もやはり北野に。船からも見えませんが、また会館の方からも神戸が見渡せるでしょう。それからウールマークのような「パールマーク」をつくらうという話も以前ありましたね。

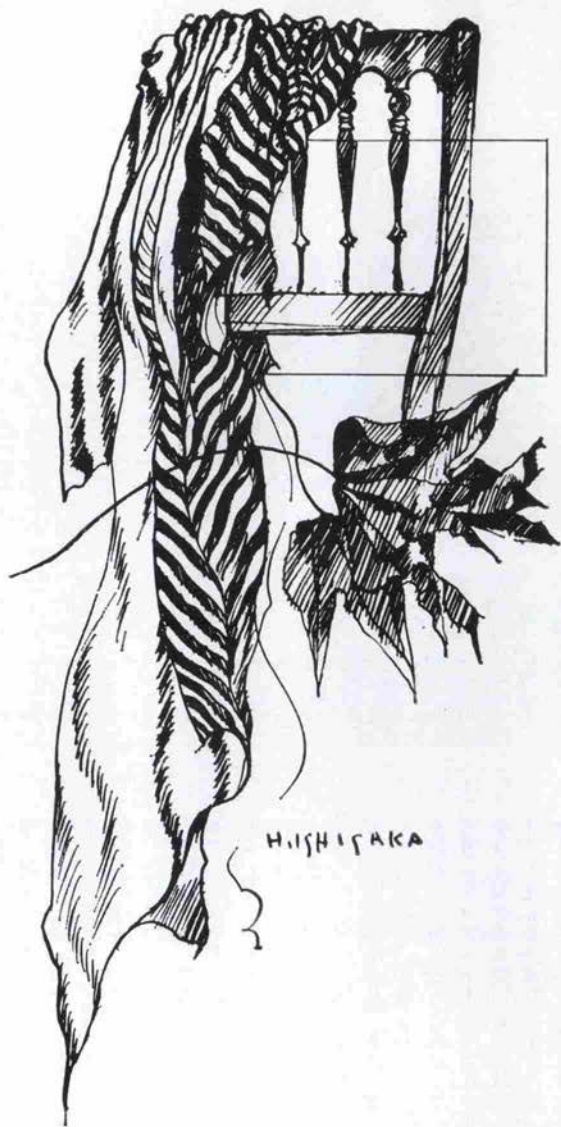
高橋 男性の襟章にも真珠をつけなくてはね。まず我々から始めましょうか(笑)。神戸に来られる行政、経済、文化関係のお客さんに、神戸のマークをあしらった真珠をプレゼントするというのはどうでしょう。それよりもまず、笹山市長の襟に、真珠をつけてもらいたいですね(笑)。

田崎真珠株式会社

取締役社長 田崎 俊作
神戸市中央区港島中町6-3-2
TEL (078) 302-3321

オールスタイル株式会社

取締役会長 川上 勉
神戸市中央区港島中町6-5-1
TEL (078) 303-3311





1994 JCI KOBE WORLD CONGRESS
THE GOLDEN ANNIVERSARY OF JCI
JCI世界会議神戸大会
1994年11月10日～20日

● JCI世界会議神戸大会を成功させよう！

友達としての交流を

楽しんで下さい

幹潤

△世界会議実行委員長▽

「Global Communication For the Future」 With the spirit

of「MOTTAINAI」をテーマに、11月10日から始まるJCI世界会議神戸大会。人の暖かさや地球に対する優しい気持ちやイメージし、様々なコミュニケーションをデザインしたポスターが完成、5月15日の神戸まつりでは、ブースを出してボランティアやホームホスピタリティについての説明をしたり、神戸で誕生した本格的ジャグバンド「春待ちファミリーB A

ND」と共にパレードに参加したりと、大会のPRにも力が入る。

「JCI世界会議神戸大会を成功させよう」第4回目は、世界会議副実行委員長の幹潤さんに、ボランティア及びホームホスピタリティについてお話を聞きました。

世界110カ国2万人のメンバーが神戸に集うこの世界会議に向けて我々神戸JCIのメンバー約400名が準備をしているのですが、会期中、様々な催しをしますので、どうしても人手が不足する

「我々と一緒になって会議を楽しんで下さい」と幹さん。

んです。そこで、市民の皆様にご協力をお願いしたいと考えています。まず、会期中各国から来神するメンバーの案内役を務めて下さる語学の出来る方を求めています。特に資格とかは必要ありませんので、海外に興味を持ち、国際交流に取



雨の降る中、神戸まつりに参加。世界会議のPRに力が入る。

り組んでみたいとお考えの方に、我々と共にスタッフジャンパーを着て、会議を楽しんで頂けたらと思います。

ホームホスピタリティは、国内外のメンバーが神戸近郊の家庭を訪問し、食事を共にしながら仕事、趣味、文化の話など個人レベルでの国際交流をはかろうとするプログラムです。僕もヘルシンキ大会の時にこのプログラムに参加したんですが、とても印象に残っていますし、僕自身好きなプログラムなんです。北欧のめったに見られない一般家庭を見ることができましたし、トナカイのシチューを食べながら、身ぶり手ぶりを入れている片言の会話でしたが、ほんとうに楽しかったですよ。難しく考えないで、友達としての交流を楽しんで頂けたらと思います。ボランティア・ホームホスピタリティに関するお問い合わせは

JCI世界会議事務局まで
☎078(242)7739

1994年JCI世界会議神戸大会

神戸が沸き上がるイベントの数々

神戸ホリデー PART I

国際大茶会

11月13日(日)

茶道における「和敬清寂」をテーマに、茶道、華道、書道などの日本の伝統文化にふれていただきます。

神戸ホリデー PART II

オルケスタ・デ・ラ・ ルスコンサート

11月18日(金)

世界で活躍中の国連平和賞受賞のサルサバンドによる音楽で楽しむひととき。

神戸大会シンボルマーク



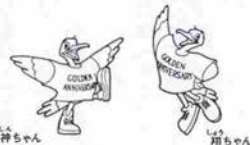
1994 JCI KOBE WORLD CONGRESS
THE GOLDEN ANNIVERSARY OF JCI

太陽は世界から集まる人々の熱い交流を、海と街は国際港湾都市神戸のイメージを、山は私たちが暮らす地球を表し、「地球市民の時代」の始まりを表現。



人の暖かさと地球に対する優しい気持ちをイメージしたJCI世界会議神戸大会のポスター

神戸大会キャラクター



港町、神戸から未来へ飛翔するカモメ。JCI創立50周年の思いを胸に、神戸大会で交わされた心、約束を、世界中に伝えるために翔いていくメッセンジャー。

フォーラムイン神戸 PART I

環境フォーラム

11月13日(日)

地球が抱える大きな問題「環境」をテーマに意見を交わします。

フォーラムイン神戸 PART II

コミュニケーション フォーラム

11月17日(木)

ふれあいの基本となるコミュニケーションについて展開します。

神戸大会テーマ

Global Communication for the Future
— With the Spirit of 「MOTTAINAI」 —



1994年、日本JCIが提唱した「もったいない運動」を「地球市民の時代」を具現化するひとつの手段と考え、世界に向けて「グローバルもったいない運動」として展開。



藤本ハルミの K・F・Mヨーロッパファッションの旅① 神戸ファッションコンテストの留学生たち

この度の、イスタンブール、プラハ、ミュンヘン、ベネチア、パリという華麗な旅は、私達KFMのプランナーであり、兵庫県洋裁学校連盟の事務局長を長く続けてをられる妹尾光子先生のプランニングである。

来年傘寿を迎えるというのに新車を購入し今でも運転するという妹尾先生がもう私の最後の旅行になるかもしれないからと、二十年前から度々行ったヨーロッパの国々の中から良かったところをよりすぐりプランをたてられた。

来年、結成以来十五年を迎えるKFMのデザイナー達には、三越の長井弘子さん、そしてプランナーの小泉さん、のぞき市野木悦子、丹野最世子さん、大西節子さん、前川富沙子さんと私とあと全員が参加した。

まだ見ぬイスタンブールのブルーモスクや、トプカプ宮殿の財宝、電通の新井満さんが絶賛したプラハの春を満喫しようとワクワクする想いで伊丹をたった。総勢十五名とそれに西鉄旅行の添乗員の笠原クンである。

それに出発前から何度も何度もパリのグラン昭子さんとFAXで連絡をとった。

神戸市のファッション協会は、毎年十一月に催される「コウベ・ファッション・フェスティバル」の中で重要な事業として続けられているファッションコンテスト

パリエッフェル塔、西村建恵さん、妹尾光子さん、藤本ハルミ。

の、グランプリ受賞者を一年間留学させ、パリオートクチュールの人材育成の中心になっている名門サンディカで勉強をさせて丸二年になり、三人の優秀なデザイナーの卵をここに送りこんでいるが、その校長先生のマダムソーラー先生が最終審査に来神なさり、厳しくも熱心に生徒に質問され、他の審査員とともにグランプリを決められている。

グラン昭子さんはマダムソーラー先生のフランス語の通訳である。

私は、第一回グランプリの小華和耕太クンが始めて渡仏した時、彼の緊張したりポートと共に送られてくるグラン昭子さんの聡明で細やかな心遣いと、始めてのパリでまだ充分に言葉も話せない耕太くんをまるでお姉さんのようにいたわり、めんどろを見、ご自分のお家へ招かれ優しくお世話をする様子が手に取るように感じられ、こんな良き人を得た事は、この留学を大成功にみちびくに相違ないと思った。

私も小華和耕太クンの母になったような気分になって、グラン昭子さんに、ほんとにありがとうとお礼のFAXを送った。

この度の旅も、このサンディカの学校を見学し、第二回の留学生の周耀鋒クンに会うのも大きな楽しみの一つであった。

昨年来神さなったマダムソーラー先生は、小華和クンがどちらかという日本人らしくシャイでひかえ目で二年目のメゾンでの実習になってやっと実力が出せるようになったと対象的に、香港から東京のファッション学校に留学した周クンが来日二年目で神戸のコンテストにグランプリを取り渡仏となったが、やはり香港の中国人の国際性というのが明るく、ものおじせず、すぐに言葉も話せるようになり、とても素晴らしいと先生は青い目をクルクル廻しながら楽しそうに話された。

サンディカの学校は、イブ・サンローランや三宅一生さんという錚錚たるデザイナーを世に送り出しているが



②元アバンにお務めでコンテスト第一回第二回に優秀な成績をおさめ自費留学した 中尾真佐子さん。 ③マルコ先生(立体) もう1人、同君、私(中央上)
 ④マダムソーラー先生の秘書ルージュさんと(左) 立体のデュバン先生(右) マダムソーラー先生はパキスタンへ出張中(中央下) ⑤テキスタイルの素達な先生(P. 57) ⑥(右)

まるで個人教授のように小人数を丁寧な教育し、パリのオートクチュールのメゾンに送りこんでいるとの事で卒業のファッションショーに、カルダンやら、ラクローアやら有名デザイナー達やメゾンの人が金の卵を発見しにやってくるらしい。

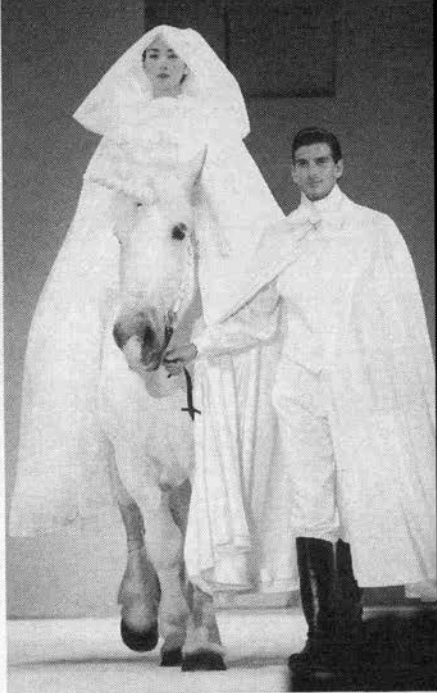
今の若い人って何で恵まれているんだろう、私は足ながおじさんのジュディアポットを夢見て果せなかった留学の夢を彼等に重ね、神戸ファッション協会から送られてくる彼等のリポートをむさぼるように読んで。

グラン昭子さんはサンディエゴの学校見学のアポイントを取って下さったほかに御主人のコネでイブ・サンローランとライロワのメゾンを見学し今年の春夏コレクションのビデオをそのメゾンでお客様のように見るといふ夢のような企画をたててくださった。

それに昨年コンテストで新しくも二位となった久才春昭くんが自費でパリに来ていて、九月から特別科に四月月ゆくことになっていたので、私達と一緒にライロワと、サンローランのメゾンに連れて行ってあげたいがいいでしょとかとFAXが入った。彼一人でメゾンに入ることなどとてもチャンスがないと考え、私達と一緒に彼にメゾンを見せたいと思ったグラン昭子さんの優しさ、私もこんな人になりたいと思った。

この旅行のフィニッシュのパリの期待も大きくふくらんで伊丹を飛立ったが、何しろ私自身、六月十一日に東京プリンスホテルでのファッションショーをひかえ、旅行ケースに必要な品をボンボンほり込んでろくな用意も出さず、くたびれはての出発であったが、デザイナーは皆同じでフランクフルトに着く十五時間半の間、私も丹野さんもゲログロ、市野木さんも気分悪いという雲ゆきあやしいブローグとなった。

(デザイナー・K・F・M会長)



世界遺産姫路城記念行事
キャストィバル'94

KENZOショー

酒井美恵子さん、兵庫県知事員原俊民夫人も懇親会に駆けつけた。



シヨの後、姫路キャッスルホテルで高田賢三さんを囲んでの懇親会が開かれ、戸谷姫路市長やマナー評論でおなじみの酒井美恵子さん、服飾評論家の大内順子さんが歓談した。

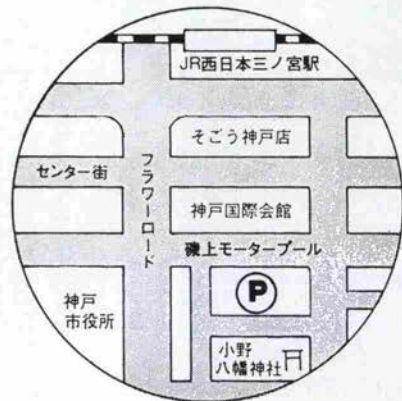
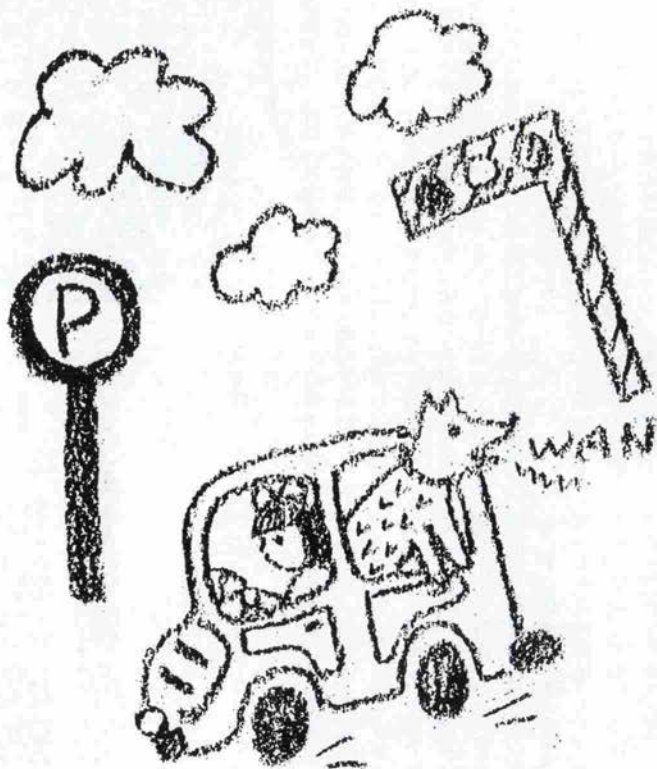
シヨの後、姫路キャッスルホテルで高田賢三さんを囲んでの懇親会が開かれ、戸谷姫路市長やマナー評論でおなじみの酒井美恵子さん、服飾評論家の大内順子さんが歓談した。

5月14日、姫路城の世界文化遺産指定の記念行事キャストィバル'94のひとつとして、姫路市出身でパリ在住のデザイナー高田賢三さんの「KENZOシヨ」が、姫路市厚生会館で開催された。カラフルなスーツに身を包んだモデルたちが、シャンパングラスを手に観客席からステージに次々と登場。'94-'95秋冬のケンゾーコレクションが始まった。サイカスやブレイクダンスなど様々なパフォーマンスが組み込まれ、フィナーレには白馬も登場、会場の観客を魅了した。

高田賢三さん(右)、大内順子さん(中)、戸谷姫路市長(左)。



ビジネスに!
ショッピングに!
ご利用ください



磯上モータープール

(神戸国際会館前) TEL (078) 251-2662 (8:00A.M.~11:00P.M.)

- 収容台数 350台
- 月極駐車可
- 年中無休



■生活の質の向上と、新たなビジネスチャンスをめざして 二十一世紀の成熟社会に ふさわしい新産業の創出を

—新産業創造プログラム

お話を伺ったひと
神田 栄治さん（兵庫県商工部産業政策課長）

兵庫県では、経済・社会構造をこれまでの経済成長重視の大量生産・大量消費型から、適度な成長を保ちながら、一人ひとりのライフスタイルや環境に配慮した産業活動が行なわれ、生活の基盤となる社会資本などの「蓄積」の充実をめざす循環・蓄積型に転換するための取り組みを積極的に進めています。その一環として、真に豊かな生活を実現するために、平成六年度から「新産業創造プログラム」をスタートさせました。

このプログラムの仕組みは、①参加県内企業グループの募集、②開発チームの選定、③同チームによる調査や企画、そして事業化計画の作成、④事業化計画の認定、となっております。そして、認定された計画のうち一定の基準を満たすものについては、県が、補助金などの特別支援を行います。

企画立案に当たり、特に県が進めていきたい分野は、「身近な環境問題への対応」「豊かで安心して暮らせる住環境の創出」「高齢者のためのシルバー関連産業」「自由時間を豊かに演出する文化・レジャー活動の支援」など、新しいライフスタイルを支え、真の生活の豊かさ

つながる成熟社会にふさわしい産業分野です。

「例えば、福祉のマンパワーなどの問題に対しては、今まで行政やボランティアの人たちが主に対処してきました。そこに企業のアイデアや製品などが加わることで新たな解決策が生まれてくることでしょう。企業間の異業種グループは県下に多くありますが、どのように事業化に結びつけるかが分からないところもあつたと思います。それを支援するのも今回のプログラムのねらいの一つです。新たな異業種グループの発足にもつながる刺激剤になればいいですね」と産業政策課長の神田さん。

自分たちの生活をどのように豊かにしたいか考えるところから新しい産業が生まれます。各消費者の意見が生かされた企画が今、求められています。このプログラムに参加する企業を動かすのは、県民一人ひとりの声なのかもしれません。

■同プログラム参加企業の応募締め切り 平成六年七月十五日(金)必着
お問い合わせは、兵庫県商工部産業政策課
☎〇七八一三六二一三三四

「ヒゲタムレ」
「どっしたん」
「立てる」
「かたが」
「出」
「来る」

「知」
「し」
「ん」
「な」
「い」
「で」
「知」
「ん」
「な」
「い」
「で」

コロンスの卵の
ような
ものかたまたま...

ピンと
こなにかたまたま...

ウーム...

高齢化に
備えてとか...

生活者側から見る
新産業の立案

企業がグループ...
いいネエ...

アイデア
コンクール
なのネ

いい
政策だ
わネ...

福祉に
関すること...

人の暮らしに
関すること...

...

Takarazuka に迫る

対談 Vol.4 タカラヅカとコメディ

舞台を見る余裕が 笑いとお洒落につながる

日向 薫 VS 桂小米朝

〈女優〉

〈落語家〉

1914年の創立以来、斬新な試みを続け、オリジナルな芸術文化を築き上げてきた宝塚歌劇。その多彩な魅力に迫る対談シリーズの4回目は、歴代トップスターの中でも随一の長身で在団中はゴージャスなムードを漂わせ、退団後はコメディ作品で活躍中の日向薫さんと、古典落語に新しい息吹きを吹き込む上方落語の若手ホープ、桂小米朝さんの顔合せ。「間」が命の笑いの舞台経験豊かな二人の会話は、次から次へとテーマを広げながら休む暇もなく展開するハイテンションのかけ合いとなりました。

舞台人のキャラクターが楽しさを作り出す

桂 僕、ネッシーさん(日向)の隠れファンだったんですよ。

日向 いや、小米朝さんみたいな有名な方は隠れないじゃないですか。

桂 何をおっしゃいますやら。

日向 その言葉大好き。紫苑ゆうが神戸出身だからよく言ってたんですよ。東京の方って「おっしゃいます」までしか言って下さらないから。

桂 そうですか。僕はネッシーさんの後に隠れて(笑)じゃなくて本当に星組はよく観ていたんですよ。カッコ良かったじゃないですか。

日向 今日、会ったら幻滅されましたよ。在団中から全然変わらないこういう人間なんですけど、そうは見えない良い役ばかり頂いていたもので…。

桂 舞台には楽屋は関係ないじゃないですか(笑)

日向 (笑)そういう方好きだわ。

桂 新しい劇場に立てなくて残念だったでしょう。

日向 旧劇場で育ってきましたから、あの劇場のクローズと共に日向薫も終わったというのは、自分としては嬉しかったですね。自分だけが退めちゃったというのは淋しいですけど。新劇場には新しいものを見に行く感覚ですよ。

桂 サヨナラ公演の薄儀も豪華な衣装で良かったんですけど、辻村ジェサブローさんの衣装で踊られたショーがありましたね。

日向 阿国のあたりの何でもやっていいような時代のものでした。



桂小米朝=かつら こべいちろう '58年生まれ。関西学院在学中の'78年に父、米朝に入門する。オペラを取り入れた「おべらくこ」など新スタイルを築く一方、TVや映画に司会者、役者としても出演。11月には大阪、近鉄劇場の「ザ・近松」で徳兵衛を演じる。

桂 そんな雰囲気かネッシーさんには合っていました。あれは舞台の人がすごく楽しそうにやっていたからそれが伝わってきました。

日向 楽しかったですよ。着物に網タイツ履いて宝石もジャラジャラ付けて。そういう組み合わせ好きなんですよ。



日向 薫=ひゅうが かおる 宝塚歌劇団出身。'76年初舞台。'88年星組トップスターに。'92年「紫禁城の落日」で退団。'93年舞台活動再開後は、ミュージカル・ショーTVに活動の場を広げている。次回作は9月東京、博品館劇場での「勝手な娘んさあとII」。

男役だとベタ靴ですし、落ち着かせるために重心を下げる体勢で立っているから違うんでしょうね。外部に出て、この身長で支障があるかと思っていたんですが、案外ないものですね。洋画でも男女の身長が逆転しているものが多いし、そういう時代だからラッキーでしたね。

桂 ネッシーさんは身長何センチですか。

日向 在団中は174センチだったのが、退めて伸びたんですよ。

桂 そんなことってあるんですか。

日向 知らず知らずのうちに無理をしていますから、背骨の間が詰まっていたのが伸びて、いま175センチなんです。ドレスを着るようになると、背筋をカッとアップしていかなかったらヒールとかも履いていられないじゃないですか。

桂 じゃあ、僕とも組めるんだ。僕166センチしかないんですけど、ノミの夫婦ということだ。

日向 お願いします。

五人変われば客席は必ずWAVEする

桂 外の舞台に立たれた感触はどうですか。

日向 大劇場育ちなので、三階席まである劇場がやっぱり嬉しいですね。ご挨拶の視線が習慣でそう



いう動きになっ
ていますから。

桂 三階席があ
るといのは役
者を育てます
ね。僕も若い頃
に歌舞伎座の落
語会で前座で出

て、ふっと見上げると、いつもお客の時は天井か
ら見ているつもりだった三階席が目の前にあるん
ですよ。

日向 三階席って近いんですよ。

桂 客席から見ると遠いのに、舞台からだすとぐ
そこに見えるのが嬉しくて、出囃子に乗って出て
行って、いつも僕が座っている三階の奥の席を見
たんですよ。そうしたら、たまたま春風亭小朝さ
んがそこに座っておられて「これだよ、これ。出
るときに俺の方を見るだろ。これで客を掴めるだ
ろ」という話をされたんですよ。だから、僕も
三階席があるステージはすごく嬉しくなります。

日向 お客様も、遠いから身を乗り出していらっ
しゃるんですよ。その姿勢が、見守っていただいで
いる感じでまた嬉しいんですよ。

桂 ネッシーさんは東京のご出身ですが、コメディ
イを演じていて関東と関西の笑いの違いみたいな
ものを感じますか。

日向 関西はこうだ。関東はどうだって言い切れ
なくなりましたでしょう。どっちもミックスの状
態だから。私も東京生まれですけど人生の半分
を関西で過ごしていますから、出身地は日本です
よね。

桂 僕は大阪の出身ですが、大阪の方がおもしろ
いものに反応するお客さんが多くて、東京は芸術
に反応する方が多いような気はするんですよ。それ
も舞台によって、日によっても違います。

日向 バーンと反応する人が五人いると、もう客
席の感じが変わりますからね。

桂 客席ってむつかしいですね。

日向 絶対笑いが起こる設定で書かれた場面は、
笑いがこないと困りますけれど、それ以外の反応
の所は毎日違うから惑わされないようにしようと思
うんですよ。『きのう、こんなに湧いたから』っ
てそれを期待して出て行ったら大間違いを起こす
ので今日は一から、と思って舞台上に立つようにし
ています。

桂 舞台で嬉しくなった感触は、その日で忘れて
次に引きずらないでやらないといけませんね。

日向 笑い方にもムフツと思うだけで嬉しい人と
ワッハッハッとやらないと気がすまない人がいる
じゃないですか。でも、どっちも楽しんで頂いて
いると思います。

桂 本当に五人笑えば変わるんですよ。

日向 その人が笑うことによって、連られて笑う
方もいますし。演じている側はそこに頼っちゃい
けないし、頼りたくなるし。コメディ、お笑いつ
てむつかしいですよ。

桂 東京と大阪の違いはないのかもしれないです
ね。関西のノリはワァワァ言うことで、東京の笑
いは乙に構えると世間で言われるからそうかなっ
て思うけれど、チャキチャキの江戸っ子とベタベ
タの関西人は同じような気がします。アクセント
が違うだけで持っているものは同じ。

日向 ただ、ご夫婦でパーティやディナーショーに出かけるように装っている時は違うかもしれない。その格好に合わせたことをしたくなるというところが東京人にはないですか。今日はフォーマルな感じで出かけているからどんな笑いが来ても私たちはフォーマル。でも、関西の方は、フォーマルな格好で出かけていてもおもしろいものが来たらドッと湧く。

桂 逆に、どんな格好の時もおもしろいものがあったら満足しない。

日向 東京人はフォーマルな格好をして出かけたということだけで、もうマル。その辺の装いの違いはあるかなという感じはしますね。

桂 それだったら関西の方がいいじゃないですか。フォーマルなドレスを着てもコメディを楽しめる余裕があるというのがある。あるクラシックの会で、

開演前に僕が入り口でフォーマルを着てエスコート役をしていると、日本人は“なに、この人”みたいな奇異な目で見ていく。外国人だけがスッと目で会釈をかわしていくんです。そういう風なものがある、これから舞台を見る余裕とか、

本当のおしゃれにつながっていくんでしょね。
日向 観客の方も変わってこられましたよね。外国のものがいい、というだけじゃなくてオープンになってきたこの感覚が好きです。

桂 そういう意味では宝塚のお客さんのもっと成長して欲しい。ショーのビートの良いところやロケットになれば、身振り手振りですべていけばいいのに、決まったところの拍手しかしない。僕なんかジャズのようなリズムに変わると、思わず指を鳴らしながら、足でカウントを取っちゃいますよ。

日向 自然に身体が動いちゃいますよね。宝塚はずっと見守る温かい応援の仕方のお客様に支えられている部分もありますけれど、それだけに惑わされてもいけないとも言えますね。私はミーハーなんですよ。身内感覚ではなく、揃って階段を下りて来るのを見たら、やっぱり鳥肌が立ちますよ。“すごいとかきれいな”って連発しながら見えています。

桂 もっとみんながそうならいいのに。

日向 舞台を見ることって、おとなしく与えられるもんだと思っていらいっしやる方が多いかもしれないけど、そういう意識ははずしてご自由に見ていただきたいですね。

桂 五人変われば客席はWAVEしますから、僕はムードメーカーになっていきたいです。見ている僕たちも参加していい舞台にしたいと思えます。

日向 私もいろんなジャンルに挑戦していきたいと思っていますから、大きな女が必要なきは、私を思い出してください(笑)。

桂 気の弱い男が必要なきは、声をかけてください(笑)。

(取材協力 新神戸オリエンタルホテル 企画 構成 瀬川)

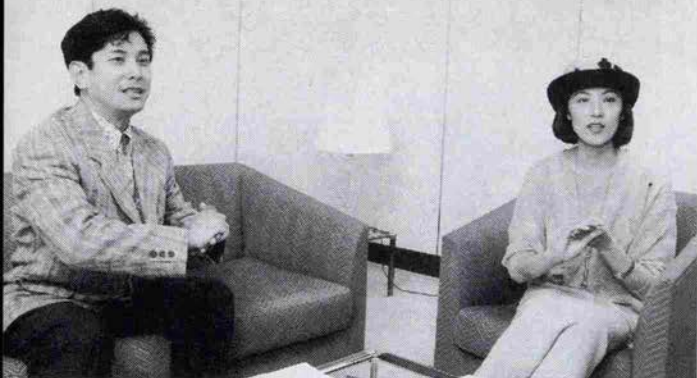




写真 上左より/田崎社長と貝原兵庫県知事を囲んで/笹山市長メッセージ/あいさつする田崎社長
パールプリンセスと中馬あこや商事社長/平原部長は中国コーナーで/タヒチコーナーで田崎社長/田崎夫人と永田夫人

●話題のひろは 田崎真珠40周年 を祝って

「夢を新たに40周年」をテーマに田崎真珠が、創立40周年謝恩レセプションを、6月12日(木)ホテルオークラ神戸・平安の間に千人近いゲストを迎えて開催した。

貝原兵庫知事は「田崎真珠さんは、世界の真珠や宝石の業界と手をたずさえて、世界の田崎に成長され、また、ロリンマゼールの音楽会を全日本で開かれる等、文化メセナにも力を入れられている」とメッセージ。笹山幸俊市長は「ファッション都市神戸の、コウベファッションフェアのリーダーとしても多大の期待をよせている。今夜は、貝原俊民、田崎俊作、そして笹山幸俊と三人の俊が集まりました」と会場を笑わせた。

田崎俊作社長は「今夜は、世界中からゲストを迎えており、会場の趣好もインターナショナルに仕上がりましたので、ごゆっくり」と余裕のあいさつ。遊びのコーナーに宝石展示を、アメリカはカジノコーナー、ヨーロッパはカフェコーナー、「ティアラ」をつける写真サービス、ブラジルはサンバ、中国は獅子舞。イスラエルは宝石占い、タヒチアンダンスコーナー等国際色ゆたかな催しだった。